

## G. ジンメルの形式社会学と E. ゴフマンの社会学

### — 儀礼行為分析のための方法論的模索 —

土 井 文 博

#### 1. はじめに

本稿は、フランスの社会学者 E. デュルケムによって提唱された儀礼行為を現代社会で分析していく上での方法論的な模索として、その分析に成功していると言われる E. ゴフマンと、彼のパースペクティブの源となっている G. ジンメルの形式社会学という発想をもとに、デュルケムのいう「積極的儀礼」を分析するための方法論を考えたい。理論的な位置づけとしてはデュルケミアンとして語られることの多いゴフマンであるが<sup>1)</sup>、方法論的にはジンメルに近いとも見れる<sup>2)</sup>。社会学の方法論においては、社会現象を個人の行為から説明しようとする「方法論的個人主義」と、逆に、個人の行為からは説明不可能で、集団を単位として説明すべきとする「方法論的集団主義」の二つが大別され、前者の代表が M. ウェーバー、後者がデュルケムとされている。これに対しジンメルは前者に組み入れられる向きもあるが、そのどちらにも属さない第三の立場に立っていると見ることができるだろう。すなわち、社会現象を個人や集団のどちらからでもなく、人々が行う相互行為そのものから捉えていこうとする立場である。ゴフマン自身、彼の博士論文の序（エピグラフ）（Goffman 1953 : iv）でジンメルの著作の一部を取り上げているが、これは、自らの社会学の領域と方法論がジンメルのパースペクティブに基づくものであることを表明したものと言えるだろう<sup>3)</sup>。そこで、まずジンメルの形式社会学という発想に立ち返り、その特性を確認したい。そして次に、それがゴフマンおよびデュルケムの社会学とどのようなつながりがあるかを検討することで、積極的儀礼を現代社会で分析するための方法論を探りたい。

## 2. ジンメルの形式社会学

ジンメルの形式社会学という発想を理解する上で、先に述べた彼の方法論的特性が持つ意味を確認しておく必要がある。分析の基点を個人にも社会にも置かないこの立場を、ジンメル研究者として知られる阿閉は、次のように述べている。

このばあい、社会も個人もともに、「自己内に完結した存在」でも「絶対的統一性」でもなく、「諸部分の實在的相互作用」の結果であるにすぎない。つまり、社会という統一性がまずあって、その統一性的人格から個々人の性質、関係、変化などが生ずるのではなく、個々人の関係および活動がまずあってこれにもとづいてはじめて、社会という統一性について語る事ができるわけである。そして個々人だけがその相互作用によって社会を構成するとは限らず、集団も他の集団と相互作用を営むことによって、社会が生じうるわけである。(阿閉1979:16)

つまり、分析対象たるべきものは個人そのものでも社会そのものでもなく、その間で繰り返される相互作用であるという。そして、その際に考察すべきは、それら個人や集団が抱く関心や目的といった「内容」ではなく、相互行為が行われる「形式」にあるとする。阿閉は彼の言葉を引用しながら、ジンメルが考える社会学の課題は「人間の集合の諸形式を記述し、一つの集団の成員である限りにおける個人と諸集団相互の関係とがしたがう諸規則を見出すこと」にあるとする<sup>4)</sup>。この形式と内容について、阿閉は次のように解説している。

かれによれば、社会を成り立たせる諸個人の相互作用、すなわち社会化は、諸個人の経済的、政治的あるいは文化的な目的や関心といった動機づけと、それらが社会的に実現されるばあいにとる「心的相互作用」の様式、つまりは「社会化の形式」からなる。そして、右のさまざまな

動機自体は、なおそのみでは社会を形成するものではなく、いわば社会化の「素材」あるいは「質料」とどまり、それが社会的に文化内容として実現されるにはこの形式によらなければならないとすれば、「社会において真に社会」をなすのは、この社会化の形式にほかならない。(阿閉1979:98)<sup>5)</sup>

このように、社会の「内容」は、個人がただ「孤立して併存する諸個人を共存と互助という一定の諸形式、相互作用という一般的な概念のもとに属する諸形式にまでかたちづくることによって」(Simmel 1908=1994上巻:16)のみ実現することが可能であるため、この形式化こそが社会の実体であるとも言えるであろう。

先ほど「社会という統一体」という言葉を引用したが、ジンメルは、この統一体がいかにして可能であるかという問いを認識論の立場からも論じている<sup>6)</sup>。それによると、我々が統一的なものとしてその存在を認めるのは、社会がそのように取り扱われていることを知ることによってであるという。その取り扱われ方こそが相互行為の形式に他ならない。ばらばらな存在にすぎない個人は、この相互行為の形式によって他者と結びつけられ、社会の成員となるのである。このように、目に見えないはずの社会も、個人が相互行為における一定の形式という「目に見える形」で行為することによって、その社会的な存在性が自他ともに確認されることになる。相互行為そのものが社会の存在性を立ち現しむるのである。これらの意味するところは大きく、われわれの社会そのものに対する捉え方を根本的に変えてしまうだろう。また、社会現象を考察する際の対象に関して、このことは大きなヒントとなる。

ジンメル自身、さらに次のように述べている。

社会を前提しさえすれば、かの個々の結合現象も形成されるというように、ただちに社会が存在するわけではけっしてない。それというのも、けっして相互作用そのもののみが存在するのではなく相互作用の特別な

様式が存在し、この様式の出現とともにまさに社会はそこに存在することになり、さらにこの特別な様式は社会の原因でもなければ結果でもなく、すでにそれらが直接に社会そのものであるからである。

(Simmel 1908=1994上巻：21)

こうした考えは、自ずと社会の定義ひいては個人の定義にも波及し、ジンメルにとっての社会学のテーマともなっている。すなわち、社会を「相互作用の総和」(Simmel 1890=1970：19) または「人々を社会化する力と関係と形式」(Simmel 1908=1994上巻：20)と表現し、社会的存在としての個人を「刹那刹那に他者との相互関係から合成されている」(Simmel 1908=1994上巻：50) 存在にすぎないとまで言う。そして、近代人の個性も社会圏の交差から説明し、それは他者と異なる量と組み合わせから形成されることになる(阿閉1979：71)。

ジンメルにとっての社会学のテーマは、ゴフマンが博士論文で引用している『社会学の根本問題』からの一節(Simmel 1917=1979：20-2)と類似する、さらに分かりやすい記述を『社会学 第1章 社会学の問題』の中に見つけることができるので、それを最後に引用しておこう。

全体として社会学はもともと次のような社会的な現象に限られていた。すなわち、そこでは相互作用する諸力がすでにその直接の担い手から切り離されて結晶化し、少なくとも観念的な統一体となっているような現象である。国家と労働組合、僧侶身分と家族形式、経済制度と軍隊組織、同業組合と地域共同体、階級形成と産業上の分業——これらや類似の大きな機関と体系が社会を形成し、社会についての科学の範囲を満たすと思われる。(中略)この諸現象のほか、人々のあいだには無数のより微細な関係形式と相互作用様式が存在し、それらは個々のばあいにはごくかすかにしか現れはしないが、これらの個々のばあいによってまったく見積もることのできないほど大量に示される。そして、それら

が包括的ないわば公式の社会的な形成のあいだにすべり込むことによって、ともかくわれわれの知る社会がはじめてもたらされる。かの公式の社会的な形成に局限するのは、人間の内的な身体にかんする初期の科学と似ており、この科学は心臓や肝臓や肺臓や胃などといった輪郭のはっきりした大きな器官に自己を局限し、広く名を与えられないか、あるいは知られていない無数の組織を省みなかった。ところがこれらの組織がなければ、かのより明白な器官もけっして生きいきとした肉体を生じなかったであろう。(中略)個別的にはごく微細ではあるが広範な無数の総合——これらの研究は大部分までこれに捧げられるはずであるが——の介入作用がなければ、社会の生活は多数の非連続な体系にばらばらに分散するであろう。(中略)このような関係はすべて人から人へと演じられ、瞬間的であろうと永続的であろうと、意識されていようと意識されないままであろうと、また一時的であろうと影響の多いものでであろうと、われわれを絶え間なく一緒に結びつける。あらゆる瞬間にもそのような糸が紡ぎあわされ、編み目が落とされてはふたたび拾いあげられ、他の糸と取りかえられて他の糸と織りあわされる。(中略)人間のあいだのしなやかな糸、微細な関係を発見することが問題なのであり、この関係が継続的に反復することによって、客観的となって本来の歴史を示すかの大きな構成体が、すべて基礎づけられ支えられるのである。(Simmel 1908=1994上巻：28-31)

### 3. ジンメル、デュルケム、ゴフマンのつながり

以上のことから、ジンメルの社会学のテーマは、ゴフマンの社会学にそのまま受け継がれているように思われる。では、ゴフマンにおいて、ジンメルとデュルケムはどのようにつながってくるのであろうか。たとえば、ジンメルの社交に関する著作の中に、デュルケムの道徳共同体論に通じる次のような記述を見つけることができる。

………会話は、謂わば関係以外のものであろうと欲しないような関係を実現し、従って、この関係においては、元来は相互作用の単なる形式であるものが、その自己充足的な目的になるからである。右のような全体的関係のため、物語や冗談や逸話を話して、それが暇潰しや無智の証拠になることが多い場合でも、同時に、よく社交の精神を生かした立派な節度を示すことがあるものである。というのは、先ず、これによって、会話が一切の個人の私事を越え、社交の根本概念に従おうとせぬ純粹個人的なものを越えた地盤の上に据えられるからである。しかし、そうは言っても、物語や冗談のような客観的なものも、その内容のためでなく、社交的関心のために持ち出されるのである。その内容を話したり聞いたりするのも、それが自己目的ではなく、そのサークルの活気、相互理解、共通意識のための単なる手段である。(中略)以上が暗示しているように、社交というのは、現実の社会における道徳的要求にとっても遊技形式なのである。この要求が直面する大問題、即ち、個人は全体的関連に従い、そのために生きねばならぬ、しかしながら、この全体的関連から個人へ向かう価値や利益の還流がなければならぬ、個人の生命は全体の目的にとっての迂路であるが、全体の生命も個人の目的にとっての迂路である。(Simmel 1917=1979: 86-7)

すなわち、会話という他者と共有する相互行為の場が個人を超えたものであり、社交の形式を保つという意味で道徳的な色彩も帯びている。また、会話の内容は社交そのものを維持しようとする手段にすぎない。そして、この社交は個人に対してその道徳的要求を行うにも関わらず、個人に与えてくれるものがあるという。これはデュルケムが社会を「集合意識」と化した超個人的な存在物であるとし、それが個人を道徳的に拘束すると同時に魅惑もするという説明に重なる。個人と社会は同時存在的で、個人は社会からその生のエネルギーをもらい受ける。こういった人間観や社会観においても、両者には通じるものがあると言えるだろう。

さらに、デュルケムが用いる「消極的儀礼」「積極的儀礼」、これらの言葉を思い起こさせるような記述も、以下のような形で見られる。

各瞬間に生命の圧力を感じるような、非常に真面目な人たちから見れば、社交というのは、実はこの人生からの逃避、厳粛な人生の束の間の無視にすぎず、自由を与えてくれるもの、明るく解放してくれるものなどを含むことは出来ないであろう。社交がこういう単にネガティブなものであることも珍しくはなからう。型に嵌まった仕来り、決まり文句の空々しい交換であることも珍しくはなからう（中略）けれども、さらに真面目な人間なら、社交のうちに、次のような、解放してくれるもの、心を軽くしてくれるものを見出すであろう。即ち、人生における一切の問題と一切の重圧とが現われる共同生活及び相互作用、それが社交では謂わば芸術的な遊戯として享受される。それが同時に繊細になり稀薄になりながら、しかも、そこになお現実的内容のある諸力が遠くから聞こえ、しかも、その重圧は蒸発して一つの魅力になる。(Simmel 1917=1979: 91-2)

ここでの、社交が有する「重苦しき」は、デュルケムの消極的儀礼に存する特徴であり、その重圧が蒸発して魅力となるのは、積極的儀礼によるものと解釈することができる。これを、ジンメルは社交という非常に身近で具体的な相互行為の中に表現している。ここがおそらく、ゴフマンの中でジンメルとデュルケムが結びつくポイントではなからうか。ゴフマンは R. コリンズによって理論的にはデュルケムの伝統の中に位置づけられているが、このように、彼の社会学のテーマや発想はジンメルに大きく負っていると言えるだろう。したがって、彼はデュルケムよりもジンメルの継承者として位置づけた方が適切かもしれない。ただ、ジンメルとゴフマンには大きな違いが存在する。それは、他者と共有する道徳共同体を維持するために個々人が行う様々な工夫、すなわちデュルケムが言うところの消極的儀礼にのみゴフマン

が着目するのに対し<sup>7)</sup>、先述したように、ジンメルは積極的儀礼に相当するものについても、言及している点である。このことは、彼の「社交衝動」あるいは「社交本能」という言葉を用いた以下の記述にも表れている。

確かに、経済団体や血盟の結社、宗教団体や盗賊の団体などにおいて人々が協力すれば、それによって、それぞれ必要及び重要な成果が得られるであろう。しかし、これらの特殊な内容とは別に、これらすべての社会化には、自分たちが社会を形作っているのを楽しむという感情や満足が附着しているものである。それは、社会形成そのものの価値を楽しむ感情であり、また、こういう生活形式を求め、往々にして個々の社会化が含む現実的内容さえ勝手に超えていくような衝動である。芸術衝動とでもいうべきものが現実の事物の全体の中から謂わば事物の形式を引き出して、この衝動にうまく適合するような特殊な構成物に作り上げるのと同じく、「社交衝動」が自由に働くと、社会生活のリアリティのうちから純粋な社会化過程を価値や幸福として切り離し、こうして、私たちが狭義の社交と呼んでいるものを作り上げる。(Simmel 1917=1979: 72)

しかし、右のような、限界や閾による社交の消極的規定に加えて、恐らく、私たちは、社交の積極的な形式原理を見出すことが出来るであろう。(中略)もし社交の源泉として、いや、実体として社交本能というものを認めるとしたら、社交を構成する原理は、次のようなものになるであろう。曰く、各人は、他のすべての人間の社交本能の満足と一致するような社交本能の満足を持つべきである。本能でなく、成果によって表現すれば、社交の原理は、次のようになる。曰く、各人は、自分自身が受け取る社会的価値(喜び、気晴らし、生き生きした気分)の最大量と一致するような価値の最大量を他人に与えるべきである。(中略)社交は理想的な社会学的世界を創造する、と言え言える。何となれば、社交では——前の諸原理が明らかにしているように——或る人の喜びは、他



の人々も喜んでいいるということと堅く結ばれていて、原理的には、何人も他人に正反対の感情を抱くという犠牲を払わせて自分の満足を感じることは出来ないからである。(Simmel 1917=1979: 77-8)

この「社交衝動」はコミュニケーション衝動と呼び換えてもいいと思うが、たとえば乳児でさえこの衝動を持っていると言えるだろう。幼い子どもはたとえ強面の人に対してでもコミュニケーションを求める行動する。あるいはさらに、この世に産み落とされる以前の胎児でさえ、外部からの働きかけに対しては、母親のおなかを蹴るキック反応などを示す。これらの理由については生物学的説明もできるかもしれないが、それが何であろうと、この事実を否定することにはならない。要するに、人間は社会的な動物である限り、コミュニケーションそれ自体を求める欲求を生得的に持っているということである<sup>8)</sup>。

しかし、ゴフマンの著作では、この「社交の喜び」の部分が抜け落ちる。社交について言及したこのジンメルの著作の中にも、ゴフマンの言うような相互行為儀礼の重要性を指摘する箇所を見つけることは出来る<sup>9)</sup>。しかし、それは社交の一側面にすぎない。このことは、上に示した引用からも明らかであろう。社会をどう捉えるか、人間をどう捉えるかは、その学者の有する人生観や人間観によって影響を受ける。ゴフマンの足跡を10年あまりかけてたどり、彼の歩んできた道のりと人物像を記した Y. ヴァンカン(Yves Winkin 1988) は、彼をアメリカの喜劇俳優ウディ・アレンと重ね合わせ、次のように評している。

しかしわれわれはゴフマンにアメリカ社会学の一種のウディ・アレンを見ずにはいられない。似たような体つき、民族的出自も社会的出自も同じで、(あるところまで)自伝的な諸作品。いずれも多作で、作風は独創的、知的でしかも自分の属する世界を超えて多くの人々に受け入れられている。両者とも深刻に悲愴である。(Winkin 1988=1999: 134)

つまり、何事にも動ぜず、時にシニカルに社会的現実を鋭く見つめる彼の洞察力の裏には、ユダヤ人というマージナルな存在としての経験があり、それゆえ彼にとって社会とは個人に圧力となって働く存在としか映らず、このような問題意識が彼を消極的儀礼の描写に終始させたのかもしれない。

これらのことから、ジンメル視点はゴフマンの研究成果を発展させるものを秘めていると言えるだろう。ジンメルの社会学的関心というフィルターを通してデュルケムの社会理論を眺めると、デュルケムが全体社会的考察あるいは宗教に関わる考察といった、生活者である個人の日常からは距離感を感じさせるものであるのに対し、ジンメルは同様の社会学的関心を高みから降ろし、我々の日常のものとして考察する道を開いているように思われる。実際デュルケムも集合意識の形成過程を宗教儀式に限定しているわけではなく、むしろ日常の中にもそのような宗教的な儀式が多く存在する事実を明らかにすることを目的としている。しかし、彼の場合、社会の日常的な出来事をそのような視点で描写するまでに至っているとは言い難い。その意味で、こうした積極的儀礼を日常の相互行為レベルで分析することは、ゴフマンのみならず、デュルケムがやり残した仕事であるとも言えるだろう。

#### 4. 積極的儀礼行為の分析に向けて

ジンメルの形式社会学では、相互行為そのものが社会を形作るものであり、さらにその内容（動機や目的）ではなく相互行為のされ方という「形式」こそが、考察の対象とされるべきであった。これをゴフマンが行った分析に照らし合わせると、どのような目的の集団においても共通して交わされる行為を詳細に見ていくことを意味するであろう。それを描写する際には、そうした行為をどのような気持ちで行っているか、それはどのような意図を有するかといった心理面の描写も、ゴフマンの著作には多く含まれている。したがって、彼の業績を社会心理学の分野に位置づける人も多いかもしれない<sup>10)</sup>。しかし、図らずもジンメルが述べているように、心理面の描写によってその分析が社会学からかけ離れてしまうと考える必要はない（Simmel 1908=1994上

卷：31-4)。社会化が心理的な現象である限り、社会学に限らず、記述の方法としては心理学的にならざるを得ない向きがある。しかし、その記述の目的が、心理学のそれである心的過程の法則を目指す必要はなく、社会化の様式、つまり相互行為の交わされ方についての説明に置かれていればいいという (Simmel 1908=1994上巻：33)。したがって、記述の方法は心理学的であったとしても、それによって何を捉えるかがポイントで、社会化の形式に目を向けていれば問題ないと考える。また、相互行為者の心理を理解できるということは、行為者自身がどのような気持ちや意図でその行為を行っているかを知り得るため、相互行為の形式を捉える上で、逆に有効に働くと言えるだろう。ゴフマンはこのような利点を生かして、彼の博士論文の題材となり、後に『行為と演技』(Goffman 1959) の下敷きともなるシュットランド島での人々の考察や、『アサイラム』(Goffman 1961)での精神病患者の世界の描写を行っている<sup>11)</sup>。

また、社会化の形式を捉えよというジンメルの教えは、相互行為の目的を問わないことを意味する。彼が先に「社交の衝動 (ないしは本能)」と名付けたものは、社交そのものを楽しむという衝動が人にあることを意味し、先述のように社交の内容に関わりなく、それを超えて共通するものを形式として捨い出すことの必要性を説いている。その社交によって人々にもたらされるものが、喜びなのか、好奇心なのか、知的刺激なのか、スリル感なのか、悲しみなのか、怒りなのかに関わらず、それらに共通する形式、これに目を凝らす必要がある。したがって、デュルケムが道徳共同体の結束を強化するものとして提唱した正の感情にもとづく積極的儀礼も、負の感情にもとづく贖罪的儀礼も、ここでは分けて考える必要はないことになろう。

デュルケムの積極的儀礼を考える上でのキーワードは「象徴 (シンボル)」と「集合意識」と「集合表象」であろう。集合意識とは抽象的な概念で人々が共通して抱く信念や感情の総体を指すが、象徴やそれが心の中の心象 (イメージ) となった集合表象を支えるものであり、それらの本体と言ってもいいだろう。象徴と集合表象は、コミュニケーションにおいて外界に表された

ものが象徴、それによって心に生み出されたもの、あるいは送り手があらかじめ心に抱いたイメージが集合表象として区別できる<sup>12)</sup>。また、象徴は集合表象と異なり、具体的な事物であるため、厳密には同一のものとはならない。同じものでも古くなっていたり、同じ言い方でも声の大きさが違っていたりするであろう。しかし、それらが作るイメージは同一のものであるため、集合表象としては同一のものとして認識が可能となる。象徴とは集合意識を具現化しシンボルとなったものを指すが、それはあくまでも集合意識のいわば乗り物にすぎず、本体は形に表されることのない集合意識の方にある。しかし、われわれがこのことを意識することは少ない。そして、集合意識は人々の儀礼行為によって作り出されるわけであるが、その集合意識が体現された象徴を人は別の儀礼行為においても様々に用いる。このように、集合意識が形成される場面での様々な象徴が用いられ、それらが重なり合うということが、物事を複雑に見せる。この世は象徴だらけになってしまうわけだ。この関係は社会と個人の関係に似ており、象徴とそれを用い、あるいは作り出す人々との間には常に循環がある。したがって、どちらで現象を捉えるかが問題となろう。象徴で捉えようとする動きは記号論に属するが、ジンメル形式社会学が支持する立場は、もうひとつの方にある。すなわち、人々の相互行為によって象徴ひいては集合意識がどのように形成されるのかを捉えようという試みと読み替えることができるであろう。象徴のみを分析する試みも一定の成果は得られようが、それだけではつかみきれないのではなかろうか。たとえば、言語の意味というものを考えてみよう。言語も象徴の一つとして挙げられるが、その意味は状況によってのみ特定される。G. ベイトソンのダブルバインド (Bateson 1972) の考えに基づけば、「おまえはバカだなあ」という表現も、それがどのように表現されるかといったメタ・メッセージによって意味が異なってくる (架場 1986)。これは、メタ・メッセージによって、そのメッセージを解釈する状況そのものが違うからである。女性の乳房の写真も、それが成人男性向けのヌードポスターのものなのか、乳児を抱えた母親を意味するものなのかによってその意味は大きく異なる。このように、

まったく同一のものであっても状況によってその意味が変わってしまうという事実があるにも関わらず、記号のレベルだけでその意味を捉えようとする試みは、状況が非常に特定されている場合に限って有効であるか、さもなくば、解釈の危ない綱渡りをしてしまう危険性が大きい。言語の意味が状況によって特定されるというのは、幼児の言語習得過程を見ても明らかであろう。まだ言葉を発しない幼い子どもにとって、親が発する言葉は単なる音声にすぎないが、たとえば、いけないことをした子どもをしかる場面で怖い顔や声を伴って、あるいは叩くという行為を取りながら、「ダメ」と声を発することによって、「ダメ」という音声が否定的な意味として子どもの中に芽生える。これは価値にもあてはまることで、「いいこと」「悪いこと」から始まって、「かわいい」「すごい」「じょうず」「男らしい・女らしい」といった価値基準は、親の行為によってこそ子どもにもたらされる。また、状況によってしか価値は判断されえないとも言える。たとえば、どちらの女優がきれいだとか、どちらのヒーローが強いかといった価値判断は、比較するものが同じ状況に置かれない限りそれらに優劣を付けることは難しい。この場合の同じ状況とは、同じ舞台の上で競い合ったり、比較されたりすることを意味するが、彼らはそれぞれが別々の舞台で一番だからこそヒーロー、ヒロインなのであって、それらを比較するといっても、自分の中に残る印象を比べるといった間接的な方法しか取りえないのが通常であろう。価値は人々の感情に訴えるものであるだけに、積極的儀礼に大きな関わりを有している。ジンメルが社会に関して指摘するように、目に見えない統一体が人々の具体的な行為の形式によって現出し、感得されるのであれば、この行為の形式を捉える必要がある。このことは価値についてもあてはまる。価値という目には見えないが人々が感じとるこの社会的な存在物、これがいかなる相互行為によって現出されるのかを見ることこそ、積極的儀礼分析の目的となろう。

もう一つ、ジンメルが教えているものとして、意味や価値というものは利那的な存在物にすぎないということが挙げられる。社会という想像上の産物は、相互行為が行われるたび、その存在性を成員が確認し合うことによって

こそ永続的な統一体として存在し続けるのと同じように、一見定着しているかのように見えるある事物の意味や価値も、実は個人間の相互行為の中でその都度実現化されることによってこそ、変わらぬ連続した存在物として認識されているにすぎない。これは、アニメーションが一枚一枚の連続から成り立っていることを観客は通常意識しないことにも似ている。たとえば、「常識」というものを考えてみよう。会社や職場によって「常識」は様々に異なる。住宅手当が家賃分まるまるつのがその会社の常識であったり、仕事中は誰であろうと禁煙なのがその職場では常識であったりするだろう。つまり、そこではその常識を日々の相互行為によって支えている集団の成員が存在するのであり、会社や職場を移った時に気づかされるこれらの「常識」の違いは、成員が異なるために生じる。そして、その常識に慣れるということは、自分もその常識を支える相互行為に、異議を唱えることなくそのまま参加していることを意味する。こうした行為は慣れによって半ば無意識化するだろうが、この参加の様子をいかに捉えるかが、儀礼行為分析の鍵となるであろう。

では、形式として具体的に何を捉えるのか。ここでポイントとなるのが相互行為者の「意識」であると考えられる。人の意識は様々なものを借りて現れ、あるいは意図的に表される。服装であったり、髪型であったり、化粧であったり、アクセサリーであったり、カバンであったり、時計であったりといった、物の場合もあるだろう。これらはゴフマンが呼ぶところの「小道具」である。しかしこれらは象徴として機能するため、主たる考察の対象としてはふさわしくない。すでに述べたように、確かに象徴と相互行為は循環する関係にある。そのため、相互行為においてこの小道具の類の象徴が用いられるが、これら相互行為の道具として用いられる「手段としての象徴」と、それらを含めた相互行為が形成しようとしている「目的としての象徴」とは区別する必要がある。考察に際し念頭に置いておくべきポイントは後者の「目的としての象徴」の方にある。「手段としての象徴」と称したが、当然ながら、それらをただ積み重ねるだけで「目的としての象徴」が作れるわけではない。それらはあくまでも手段なのであって、それを道具として使う使い手、すな

わち相互行為者がそれらの象徴をどのような意識を表す道具として用いているのかを捉えることが重要である<sup>13)</sup>。しかし、こうした「象徴」と、意識の表出を表す他の「行為」とを同列のものとして扱うことは、混乱を招くおそれがある。そのため、以下では行為主体の行為そのものに関してのみ、さらに考察を行うことにする。

相互行為者の意識を表すコミュニケーションの主要要素として、視覚的情報と聴覚的情報の二つがあろう。意識表出の視覚的要素としては、ポジション、ポーズ、ジェスチャー、視線、表情といったものが挙げられる。一般的に、後者ほど意識の表出は強いと考えられるだろう。また、聴覚的要素としては、言葉の意味内容という言語的要素と、声の調子や抑揚といった非言語的要素がある。特に非言語的要素には感情が強く表される。

この「感情」は積極的儀礼が展開されていくために欠かせないもので、相互行為者がお互いの感情をともに高揚していけるかどうかか鍵となる。そのため、感情の表出と意識の表出は分けて考える必要があるだろう。意識を共有しているという段階では、感情が高揚している必要はない。むしろ、感情的にはトーンダウンして、相互行為をできる相手であるかどうか、すなわち、お互いを尊重するといった道徳共同体を共有できる相手であるかどうかを冷静に検討し合う必要がある。その際に、自分が相互行為能力の保持者であることを伝える目的で、自己呈示が互いに行われる。これがゴフマンの言う相互行為儀礼、デュルケムで言えば消極的儀礼に相当する。これをベースに、その確認ができた者同士が上がることでできる次のステージとして、積極的儀礼が存在する。デュルケムの言葉で言えば、意識の単なる共有から、感情の高揚によってもたらされる「意識の融合」状態に至り、それが「集合意識」を形成することになるが(Durkheim 1912)、この感情の高揚をもたらす相互行為が積極的儀礼を指す。集合意識はそのままでは観察できず、象徴の姿を借りて現れるため、実際にはこの象徴の作られ方を行為レベルで見ることになるだろう。

私が現在考えている相互行為儀礼の具体的な考察対象は、テレビ・コマー

シャルである。ゴフマンのような日常の対面的な相互行為ではなく、テレビCMをその対象とするのは突飛に思えるかもしれない。しかし、現代のような情報化社会においてテレビは日常化し、ほとんどの家庭でリビングの中心的な存在となっている。そこからは常に視聴者の注意を引こうと、日々膨大な数のCMがお茶の間に降り注がれているが<sup>14)</sup>、このリビングという空間自体を相互行為の場と考えた場合、視聴者はテレビ画面から一方的に投げかけられる「注意を引くための刺激」に否応なくさらされることになる。リビングにおいて、テレビ画面自体が視聴者である家族の焦点として存在し、積極的儀礼が展開される上で必要な「注意の焦点」<sup>15)</sup>が、恒常的に与えられている。

ここで、相互行為におけるいくつかの段階を大まかに考えてみよう。第1段階として、相互行為もおぼつかないような状態が考えられる。これは、まったく見知らぬ人々と対面的な状況に居合わせた場合に覚える戸惑いで、相手の存在を意識せざるを得ないが、お互いどのように関与し合ったらいいか分からない状態を指す。第2段階として、お互いが相互行為者として認知し合うためのあいさつなどが交わされた後の状態が考えられる。しかし、同じ相互行為の場を共有してはいるものの、いわば社交のない状態、あるいは社交が禁じられている状態で、息苦しい雰囲気が漂う。この息苦しさから逃れるため、人は社交を求めることになるだろう。第3段階としては、相互行為をよりスムーズに展開するために、相互行為者間に「なごみ」を作る工夫がなされる。つまり、お互いの相互行為能力をモニタリングし合うそれまでの関係から、感情の発露によって、そのモニタリングを弱める、少なくともそう見せる工夫がなされる。感情を出すということは、自分がモニタリングの呪縛を解ける人間であることを相手に示すことになり、お互いの気疲れをやわらげるための信号と言えるだろう。もちろんこの感情の発露はそれ以前のルールに則った状態で行われねばならず、そうしたルールを外した感情の表出は相手を当惑させることになる。おそらくこの段階までは、ゴフマンの考察の射程に入るであろう。第4段階として、相互行為者間に単なる「なごみ」を作る状態から、相互行為者がお互いに感情を表出し合い、その感情を高揚



し合う状態が考えられる。第3段階での感情はあくまでも相手との間に道徳共同体を形成するための工夫、言い換えれば相互行為をスムーズにすることが目的であるため、感情は一時的にしか用いられず、すぐにトーンダウンしてしまう。しかし、第4段階では、感情が継続的に表出され、かつ、それが相互行為者間でお互いに高揚していくという状態を指す。この第3段階から第4段階への移行は流動的で、その進退は繰り返されるであろう。つまり、相互行為における感情の状態によって常に変動する。このような進退は第2段階と第3段階の間にも想定でき、感情の発露が見られず、「なごみ」のない固苦しい相互行為に戻ることもあるだろう。お互いに気心の知れた間柄では、この第3段階への移行がスムーズにいくことから、固苦しさやそれに伴う気疲れはしなくて済む。このように考えると、第2段階から第4段階にかけては、感情の有無とその状態によって、容易に移行すると思われる。

このように段階を分けて考えると、テレビCMの分析は第4段階の一部として位置づけることができるのではないだろうか。CMはイメージが重視されるため、視聴者の感情に訴えるため工夫が多用される。ここに、感情の高揚を促すための要素を見つけない。対面的相互行為では、注意の焦点が作られ、物や言葉が象徴となっていくが、その注意の焦点が形成された後に、それが象徴となっていくための工夫として、参考にできると考える。注意の焦点にはなっても象徴とならない場合もある。その場合、どのような要素が欠けていたのかを見ることで、逆に、象徴となるための要素を考察することができるであろう。

このように、テレビCMは対面的な相互行為の分析を見越した上での研究対象であるわけだが、対面的な相互行為の場合と決定的に違う点がある。それは、CMには登場人物やナレーションによる音声の他に、ほとんどのケースでBGMとして音楽が付与されている点にある。音楽はテレビ画面から視聴者に向けて常に開かれている感情であって、感情の高揚のための重要な要素を占める。音楽が伝えるこの感情は、映像に異なる意味をもたらす。このことは、同じ映像に異なる印象の音楽を付与することによって容易に確かめる

ことができる。まったく同一の映像であっても、その映像と共に流される音楽がどのようなものであるかによって、その映像の持つ意味が異なってくるのだ。制作者にとって映像と音声は本来別物で、いかようにも合成できる代物であるということは、今や自明の理であろう。特に音楽の力は感情の高揚に効果的で、このことは、テレビの音声を消して、流れる映像のみを眺めることによって容易に確かめることができる。おそらく、その多くに無味乾燥な印象しか抱かないだろう。また、たとえ感情の高揚をもたらさなくとも、音楽は意識が注がれている状態を感じさせる。このことを視覚的にたとえると、何かに祈りを捧げている人の姿に似ている。音楽は人が奏でるものであるが、その奏でること自体に人の意識の働きを感じるとも言えるだろう。したがって、音楽を流すだけでも、注意の焦点の形成には大きな役割を果たしているものと考ええる。

このような違いが対面的相互行為との間にはあるものの、テレビCMを分析することは、意識がどのように表出されることで価値付与のプロセスが繰り返り広げられるかを考察するのに役立つであろう。

## 5. おわりに

以上、ゴフマン社会学の方法論的中核をなす形式社会学の考察から始まり、ジンメルとデュルケムの類似点、ゴフマン社会学の発展の可能性を示し、最後に積極的儀礼行為の分析に向けての方法論を検討した。ジンメルの著作はまとまりを欠き分かりにくい面もあるが、示唆に富み、ゴフマン社会学の基本的な視点、あるいはそれ以上の視点をすでに提唱していると言える。そうしたパースペクティブを確認することによって、何をどう捉えていくべきかの示唆を得た。相互行為儀礼を分析していく上での研究対象として、テレビCMを考察するためのポイントも検討したが、分析に取りかかった際、それらの検討がどれくらい生かせるか疑問な点もある。また、分析を進めていく中で、ここでの見解は修正を余儀なくされるかもしれないが、分析に向けた出発点として一定の成果はあったと考える。

## [注]

- 1) ゴフマンがデュルケミアンであるという先鞭を付けたのは R. コリ  
ンズ (Collins 1980) であるが、こうした彼の主張は大村英昭 (大村1985)  
や石黒毅 (石黒 1985) によっても紹介され、一つのゴフマン解釈とし  
て定着している感がある。
- 2) 阿閉吉男 1991: 70-1
- 3) ゴフマンが引用した箇所は、清水幾太郎訳『社会学の根本問題』が参  
考になる。(Simmel 1917=1979: 21-2)
- 4) 阿閉 1979: 16。引用箇所は『社会分化論』の序説の中の一節 (Sim  
mel 1890=1970: 7)
- 5) 出所は『社会学』第 1 章 社会学の問題 (Simmel 1890=1970:  
180-2、1908=1994上巻: 15-7)
- 6) Simmel 1890=1970: 17-9、1908=1994上巻: 41を参照のこと。
- 7) デュルケムの消極的 (negative) 儀礼、積極的 (positive) 儀礼とい  
う概念は、儀礼の行われ方が単に回避的 (ネガティブ) か提示的 (ポジ  
ティブ) かという以上のものを意味している。この点については、以前、  
筆者が指摘している。(土井 1993、1994)
- 8) このように、社交を行うこと自体に魅力があり、その内容や目的をそ  
うした衝動が上回ってしまうとなると、たとえそれが反社会的な行為で  
あっても社交の手段として用いられる可能性を示唆している。このこと  
は、以前から日本で社会問題となっている「いじめ」や非行の解釈にも  
応用可能かもしれない。
- 9) たとえば、以下の引用箇所では、ゴフマンが用いる「自己呈示」「演技」  
「儀礼としての相互行為」といった要素が凝縮した形で表されている。  
このように、社交は、芸術や遊戯と同じ様な性格をもって行われる  
社会化の抽象であるから、社交は、この上なく純粋な、この上なく  
透明な、この上なく軽い魅力を湛えた相互作用の様式を必要とす  
る。即ち、平等な人たちの間の相互作用の様式であることを要する。

社交においては、その根本理念のゆえに、人々は、自分たちの客観的内容の多くを捨てた人間、自分たちの外的及び内的な意義を変えて、自分たちが社交的人間として平等であり、相互作用の相手である他の人々が社交的価値を獲得するという条件の下でのみ自分も社交的価値を獲得し得る、そういう人間であるかのように振舞わねばならぬ。社交というのは、すべての人間が平等であるかのように、同時に、すべての人間を特別に尊敬しているかのように、人々が「行う」ところの遊戯である。(Simmel 1917=1979: 80)

これを見ると、ゴフマンの社会学理論の礎はすでにジンメルによって与えられていると言っても過言ではなからう。

- 10) 実際、ハーバート・ブルーマーに招かれてカリフォルニア大学バークレー校の社会学部に客員助教授として赴任する際にも、社会心理学の領域の研究者として招かれていたとされる。(Winkin 1988=1999: 125)
- 11) こうした参与観察の有効性を、アサイラムの中で次のように記している。

当時も現在も変わらない私の信念は、どんな人びとの集団も、それが囚人であれ、未開人であれ、飛行士であれ、また患者であれ、その人びと独自の生活様式を発展させること、そして一度それに接してみればその生活は有意味で、理にかなっており、正常であるということ、また、このような世界を知る良い方法はその世界の人びとが毎日反復経験せざるを得ぬ些細な偶発的出来事をその人びとの仲間になって自ら体験してみることに、というものである。(Goffman 1961=1984: i)

- 12) 「象徴」という言葉の定義は難しいが、竹沢尚一郎(1991: 152)は「意味を伝え、それによって認識やコミュニケーションが可能になる事物、対象、道具などの総体」としている。また、彼はシービョク(T. A. Sebeok)による記号の6分類をを紹介し、社会学において一般的に象徴として扱われる範囲は、下記の2から5までとする。

1. 信号 (signal) : 交通信号、動物の言語など、受け手の側に機械的にある反応を引き起こすもの。
  2. 兆候 (symptom) : 高熱と風邪、煙と火事など、記号の表現とその内容とが自然なつながりで結ばれているもの。
  3. 類像 (icon) : 絵画やメタファーなど、記号の表現とその指示対象の間に形態的な類似性があるもの。
  4. 指標 (index) : 時計の針など、記号表現とその内容とが接近しているか、その一部であるもの。
  5. 象徴 (symbol) : 言語、身振り言語、手旗信号など、記号表現と指示対象のあいだに、類似性でも接近性でもない、慣習的なつながりだけがあるもの。
  6. 名称 (name) : 固有名詞のように、そのものを指示するだけの機能しかもたないもの。
- 13) 人はそこに他者の意識が働いていなくとも、自分の意識作用によって象徴それ自体に意味を感じ取るものであるが、相互行為という場合には、自分の意識作用のみによって意味を与えることにはならない。他者によって自分のそれが支持される場合もあれば、変更を迫られる場合もある。このあたりには、相互行為者間でその象徴をめぐる多少の綱引きが起こるが、社会的な支持が強い象徴ではこのような綱引きは起こりにくい。価値の変動が起こりやすいファッションの世界では、それを身につけていることが自分の社会的価値を決める大きな要素にもなるため、人々は社会的な支持を得られていると確信できるものをファッション誌などマスメディアに求め、意味のゆらぎを回避しようとする。人々がコミュニケーションしようとする場合には、誤解を生じさせないためにも、こうした意味の不確かな象徴の使用は自ずから避けられることになろう。したがって、基本的には行為主体がどのような行為の中でその象徴を呈示しているのか、それは行為主体のどのような意識を表出するのに役立っているのか、あるいはどのような意識の表出として受け取るこ

とができるかということ考察することが重要であろう。

- 14) CMの内容分析に先立ち、著者自身、CMの数量分析を行っているので、数量的なデータは土井2000、2001a、2001b、2002、2003を参考にさせていただくとよい。
- 15) 「注意の焦点」の必要性については、コリンズの著作(Collins 1988: 44)を参照のこと。

### [参考文献]

- 阿閉吉男 1979 『ジンメル社会学入門』有斐閣
- 1991 『新版 ジンメルの世界 空間・都市・文化・歴史』文化書房博文社
- Bateson, Gregory 1972 *Steps to An Ecology of Mind*, Harper & Row, Publishers Inc., (=1990 佐藤良明 訳、『精神の生態学』思索社)
- Collins, Randall 1980 “Erving Goffman and the Development of Modern Social Theory,” Jason Ditton ed., *The View from Goffman*, New York: Macmillan, 170-209
- 1988 “Theoretical Continuities in Goffman’s Work”, Paul Drew and Anthony Wootton eds., *ERVING GOFFMAN*, Cambridge: Polity Press, 41-63
- 土井文博 1993 「E. デュルケムと E. ゴフマンの儀礼概念とその相違」『社会分析』社会分析学会、21号: 1-10
- 1994 「道徳共同体論にもとづく社会分析のあり方」『社会学評論』日本社会学会、179 (Vol.45、No.3): 2-17
- 2000 「熊本市におけるテレビCMの実態調査—数量分析(1)」『社会関係研究』、熊本学園大学社会関係学会、第6巻1・2号: 31-53
- 2001a 「熊本市におけるテレビCMの実態調査—数量分析(2)」『社会関係研究』、熊本学園大学社会関係学会、第7巻2号: 127-60
- 2001b 「熊本市におけるテレビCMの実態調査—数量分析(3)」

- 『社会関係研究』、熊本学園大学社会関係学会、第8巻1号：109-152
- 2002 「台湾におけるテレビCMの実態調査—数量分析」『海外事情研究』熊本学園大学附属海外事情研究所、第30巻第1号：95-118
- 2003 「イギリスにおけるテレビCMの実態調査—数量分析」『海外事情研究』熊本学園大学附属海外事情研究所、第30巻第2号：37-61
- Durkheim, Emile 1912 *Les Formes elementaires de la Vie religieuse: Le Systeme totemique en Australie*, Paris (=1941 古野清人 訳『宗教生活の原初形態 上・下』岩波書店)
- Simmel, Georg 1890 *Über soziale Differenzierung, Sociologische und Psychologische Untersuchungen*, Duncker & Humblot (=1970 居安正 訳『現代社会学大系 第1巻 社会分化論 社会学』青木書店)
- 1917 *GRUNDFRAGEN DER SOZIOLOGIE —INDIVIDUUM UND GESELLSCHAFT* (=1979 清水幾太郎 訳『社会学の根本問題——個人と社会』岩波書店)
- 1908 *SOZIOLOGIE. Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Berlin: Duncker & Humblot (=1994 居安正 訳『社会学 上巻・下巻』白水社)
- Goffman, Erving 1953 *COMMUNICATION CONDUCT IN AN ISLAND COMMUNITY*, THE UNIVERSITY OF CHICAGO
- 1959 *THE PRESENTATION OF SELF IN EVERYDAY LIFE*, New York: Doubleday & Company Inc. (=1974 石黒 毅 訳『行為と演技』誠心書房)
- 1961 *ASYLUMS: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*, New York: Doubleday & Company, Inc. (=1984 石黒 毅 訳『アサイラム』誠信書房)
- 1963 *BEHAVIOR IN PUBLIC PLACES: Notes on the Social Organization of Gatherings*, New York: Macmillan Publishing Co., Inc. (=1980 丸木恵祐・本名信行 訳『集まりの構造』誠信書房)

- 石黒 毅 1985 「儀礼と秩序—初期のゴッフマン社会学における表出の機能論的微視分析」『現代社会学 19 特集=アーヴィン・ゴッフマン』アカデミア出版会：30-63
- 架場久和 1986 「9 ダブル・バインド (G. ベイトソン)」作田啓一・井上 俊 編『命題コレクション社会学』筑摩書房：59-64
- 大村英昭 1985 「ゴッフマンにおける〈ダブル・ライフ〉のテマー—演技=儀礼論の意義」『現代社会学 19 特集=アーヴィン・ゴッフマン』アカデミア出版会：5-29
- 竹沢尚一郎 1991 「シンボルと秩序」今田高俊・友枝敏雄編『社会学の基礎』有斐閣：151-77
- Winkin, Yves 1988 *Les Moments et Leurs Hommes*, Paris : Editions du Seuil (=1999 石黒 毅 訳『アーヴィング・ゴッフマン』せりか書房)